

フランス Laval Virtual 出展で得たもの

出原至道ゼミ 経営情報学部3年 永野 文弥

私たちは、2015年3月卒業の大塚隆広さんのバーチャルリアリティ作品「Blazing Exorcist」をフランスの技術展「Laval Virtual」で4月8日から12日まで展示してきました。

出展した「Blazing Exorcist」は、熱を感じることができるシステムです。ユーザは炎を操る魔法使いになって、手に溜まった炎を飛ばすことで妖怪を退治することができます。

今回、書類応募時から彩藤ゼミに大変お世話になりました。モデリングから動画作成まで、この協力がなければ審査通過はなかったでしょう。

私は、春休みの間、「Blazing Exorcist」のプログラムを書く作業をしました。これは、チームメンバーが作ったモデル、アニメーション、エフェクト、デバイスなどを組み合わせて一つの作品として動かす責任のある仕事でした。

この仕事をやるうえで助けになったのは、出原ゼミでの1年間でした。私は多摩大学に入るまで、プログラミングの経験がありませんでした。だからこそ、出原ゼミでの1年間は初めてのことがたくさんで刺激的でした。例えば、私が出原ゼミの研究でよく使う Kinect というデバイスは、人の動きや距離、色の情報など様々な情報を取得することができるので、これを使った VR 作品や研究への活用法を考えるのは楽しいです。

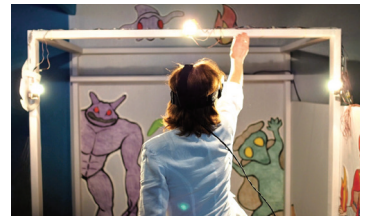
夏からは、出原ゼミの研究だけでなく慶應大学主催の「Top Gun Project」にも参加しました。私よりもはるかにできる人々と関わることで、私の能力の低さを再確認し、できる人たちのレベルに少しでも近づくために自分で考え、努力しました。このときのチーム作品は、日本科学未来館で開催された DCEXPO で展示されました。私が、研究をしている中で、一番大切にしている考えがあります。それは、できるかできないかの二択で考えるのではなく、やるかやらないかの二択で考えるということです。プログラミングに限ったことではありませんが、最初からできる人などいません。でき

るかできないかで物怖じしている暇があったら、やってみてできないから少しできるように・少しできるからもっとできるようにしようとしてきました。この考えを基に、私自身の技術の限界に悩まされながらも、1年間ひたすら、少しずつ知識、経験を積み重ねてきました。

その上で、「Blazing Exorcist」は、私にとって、出原ゼミでのこの1年間の集大成でもありました。

展示の手応えとしては、展示期間中システムを稼働させ続ける出原ゼミの伝統を守ることはできましたが、動作が不安定になることがあり、私の技術レベルの低さを改めて痛感しました。しかし、そんな中でも何度も遊びに来てくれた現地の子供たちや同じ会場で出展している学生や企業の方々が、私たちの作った作品で楽しんでいる姿を拝見し、これまで地道に積み重ねてきたことの成果が得られた実感を得ると同時に、これからの研究開発をしていく上での活力になりました。

他の出展作品は非常に完成度が高く、今の私では敵わないという危機感を感じました。これからの一年でどれだけ継続してスキルを磨くことができるかが重要だと考えます。今回の経験を活かして、次の Laval Virtual には、私の VR 作品で挑戦します。



体験者のようす



説明は英語とフランス語で

出原ゼミの歴史に加わるということ

出原至道ゼミ 経営情報学部2015年卒業 大塚 隆広

フランス Laval で行われているヨーロッパ最大級のバーチャルリアリティ・インタラクティブ技術展「Laval Virtual」に、私が中心となって開発した作品「Blazing Exorcist」が出展審査を通過し、4月8日から12日まで、5日間の展示を行うことができました。私にとっては、昨年の「Project Abyss」に続き、2年連続の作品展示となりました。

作品の応募部門である「ReVolution」は、世界中から応募が集まる国際大会で、特に今年は審査委員長が「熾烈な競争だった」とわざわざコメントする中での審査通過となりました。日本からは他に、筑波大学、電気通信大学、東京工科大学などが展示を認められました。この部門では、昨年の展示を手直しした程度では、まったく話になりません。昨年、展示を終えて4月に帰国してからすぐ、私は新しい企画に向けて実装を開始し、1年かけて結果を出すことができました。

今年の「Blazing Exorcist」では、3Dゴーグル「Oculus」をかぶり、手のひらに火の玉を出して怪物と戦う退魔師を体験できます。画像だけではなく、火の玉を出すときと本当に手のひらが暖かくなります。実際には、白熱灯を手のひらに向けて動かし続け、火の玉が出たところで点灯するという仕組みになっています。

この応募には、大きな問題がありました。展示期間が、私が卒業した後の4月で、私自身は現地で展示作業ができません。一方で、現地で調整作業や問題対応は必須です。このため、1月の応募前後から、展示に参加する2年生（現3年生）が、全てのシステムを理解し、「自分たちの作品」として展示できるよう指導する必要性がありました。正直、自分がやったほうが早いと

思うことがよくありました。技術的にも精神的にも、2年生達には重い負担となったと思いますが、その分、大きく成長してくれました。

私は、出原ゼミに所属して、上の世代から多くのものを受け取ってきました。初めて学外のコンテストに応募して全国2位となった田中雄さん、フランス招待展示賞を獲得して海外に出るきっかけを作った高田泰生さん、直接海外コンテストに応募する道を開いた齊藤満さん、招待クラスで宿代・飛行機代を主催者負担で展示した藤田倫太郎さん、フランスの学生と共同作品を作った後木貴博さんを始めとして、多くの方々が先鞭をつけ、技術やノウハウの蓄積を行ってくださっていました。

出原先生からは今回、「2つの展示を通したのは君が初めてだ」と言われました。私も、この出原ゼミの歴史に加わって、下の世代に何かを残せたのではないかと思います。

現在、私は「株式会社たゆたう」でゲームの開発を行っています。周りを見ると、すごい技術の人たちばかりで、ときに自信を無くしそうになりますが、これまでの自分の努力と成果を支えに、これからも頑張っていきます。



来日した昨年度のチームメンバーに企画説明中

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

「メディアを創る」ってなんだ！？ ～メディア実践論の日々がはじまった～

経営情報学部 3年 張ヶ谷 芳子

メディアをつくるって一体何だ！？

このプロジェクトゼミの科目名を見て浮かんだ「疑問」だった。私にとってメディアとは、発信されてくる情報を受けとって、見たり、読んだりしている受け身のものだったからだ。講義目的には、誰もが情報発信の主体「送り手」になれる時代がやってきているとあった。これが私の心を揺さぶった。

とにかく授業に出てみた。

「メディア実践論」というが、どんなふうに進めるのだろうかと思っていると、現れた先生はとにかく力強い。「大きな物語を描け」などと言いはじめる。一人ひとりに発言を求め、みんなの行動をしっかりと見ている。そして、大学内を歩いている間にも「何か面白いことはないか」とよく目を凝らして見なければならぬと言う。話を聴いていると、私が思ってもみなかった様々な視点で周りを見ていて、ヘーという発見があってハッとさせられた。

実は、私は高校生の時に先生からすすめられて地域の産業フェスティバルの取材をしてホームページの記事を書いたりした経験があった。今も普段 Twitter をやっているのだが、私には、情報を発信しているという意識があまりなかった。けれどたしかに情報の発信をおこなっているのだ。それをあらためて思い出させてくれた教室だった。企画を立てて、取材して、情報を発信することに取り組んでみたいという興味がどんどん湧いてきた。

「企画を考える」という授業で、私が取り組んでみたいと思ったのは「電車」である。私はもともと電車が好きだ。ある日、地元の駅で電車の写真を撮っている人を見て、一体電車の何に魅せられているのだろうか、と疑問に思い調べ始めたのがきっかけだった。調べてみると、普段なんとなく乗っている電車だけれど、路線や車両ごとに、色々な違いがある。見た目の色やデザインだけではなく、椅子の材質や扉も違う。ある日、何も考えずに電車に乗ったら、あれ？なんだかスムーズに乗れた。振り返ってみると扉が少し広い。ラッシュ時の混雑を緩和するために扉が大きく作られていたのだ。何気なく使う交通手段だけれど、よくよく見れば、利用者のことを考えて車両を作っているのが見えてくる。ドアのサイズだったり、座席に色分けがしてあったりと、あまり気づかないことかもしれないけれども、電車はおもしろいのだ。

しかし、どんな切り口で電車を描くのか、また、それが「多摩地域を見つめる」というゼミの目標とどう交わるのか、まだ詰めきれていない。目の前に広がる世界には様々な、人に伝えられるべき「驚き」があるけれど、それに気づいていないことがある。私が当たり前と思っていることでも、隣に居る誰かは知らないかもしれない。

「メディアをつくるってなんだ」、最初に抱いたこの疑問を大事にして、私は、それを探して行きたい。

まだ入り口に立ったばかりだが、大きな物語を描くことをめざして。



カメラを構えると俄然緊張



発見！ほんの少しだが広がった扉
(小田急永山駅にて)

「無関心」から探求心へ ～私をひらいたドキュメンタリー～

経営情報学部 4年 永野 泰寛

とんでもない「失敗」がすべてのはじまりだった。

私は、自分が興味を持ったものは積極的に学びに行くように心がけてはいる。ある時友人の話から「メディア実践論」の存在を知った。昨年春のことだ。しかし、映像や番組制作というものにまったく興味はなかった。なのに、なんとなく、本当になんとなく、プロジェクトゼミの教室に足を踏み入れてしまった。教室では、映像制作とか、ドキュメンタリーとかいう言葉が飛び交っていた。そんなものに関心の無かった私だが、とにかく熱っぽく語る木村先生の情熱に引き込まれて、私はメディア実践論の履修を決めた。もう履修登録終了間際のことだった。

「永野君、履修者名簿に君の名前がないけど・・・」と、先生。

「エエッ！！」

履修登録が済んで二週間ほど過ぎた頃のこと。なんとということだ！私の登録ミスだった。しかし私は「メディア実践論」に参加することを決めた。履修登録していない「非正規学生」だったが、先生とゼミ生達はみんな温かく私をメンバーとして受け入れてくれた。

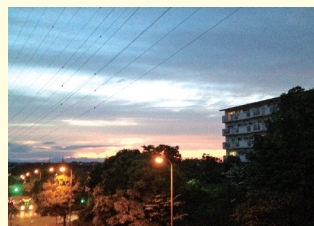
教室では様々なドキュメンタリー映像に触れることになった。私は次第に、メディアの存在価値というものを考えるようになった。一見、普通の日常を撮っているだけのように見えるドキュメンタリー映像が、社会問題を鋭く映し出すことがあることも、肌を通して知った。ドキュメンタリー作品の深さについてこれほど考えたことは今までに無かった。単なる映像ではなく「意味のある映像」の重要性を深く考える機会にもなった。

授業に参加して間もない頃の私は「撮りたいものを純粋に撮ればいい」という考えだったが、「自分が撮りたいと思うだけでは作品として完成することはない。ドキュメンタリー作品は人のところに訴えかけるものでなければならぬ」という考え方に徐々に変化していった。映像として撮れるものは限られた「小さなモノ」かも知れないが、人間や物事の本質に迫ることができれば、何十倍、何千倍もの大きな世界になることに気づいた。

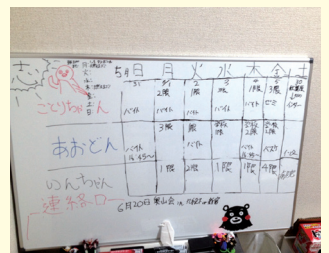
そこに行きついた時、自分がパチッとほじけたように感じた。私がひらかれたと言ってもいいだろう。

「正規のゼミ生」となった今年度、私は、新設された多摩大学のシェアハウス型の学生寮にフォーカスを当てて取材したいと考えている。多摩ニュータウンに設けられた学生寮に住む条件の一つである「地域貢献活動」は地域社会とそこに住む人たちにどのような意味をもっているのか、高齢化と施設の老朽化が問題になって久しい多摩ニュータウンの再生と地域の創生にどう貢献できるのか、その現状と地域の未来について、映像を通して描いてみたいという発想だ。心強いことに、私の場合とは違って履修登録ミスではなく本人の強い意思で参加してきた「非正規ゼミ生」で入学以来の友人でもある豆生田泰樹君が共同制作に加わることになった。

「多摩地域を見つめる」「大学を記録する」という「メディア実践論」の二本の柱を結ぶだけでなく、多摩学と連携するテーマでもあるこの企画を、ぜひ成功させたい。卒業にむけて記念となる作品にするために全力で頑張ってみようと思っている。



多摩大生三人の団地生活が始まった
(多摩市聖ヶ丘)



部屋には白板、志の字がまぶしい

社会人へのステップ SGS で学べるのは英語だけじゃない！

グローバルスタディーズ学部 4年 相原 亜斗夢

私が SGS で過ごしている時間は常に成長を実感することができる環境です。というのも自身が苦手である英語を学びながら社会人になるための練習が授業を通じてできているからです。この機会に私がどのように成長してきたか、また英語が得意でなかった中でこの SGS に入学することになったきっかけなどを書きたいと思います。

私は中学時代から英語はまったくできませんでした。その中でできないからやりたくないという気持ちになっていき、高校一年の二学期に赤点を取ってしまいました。そのときも相変わらず英語に触れたくないということで、冬休みもまったく勉強せずに追試も落ちてしまい、進学どころか進級が危ぶまれていました。そこから塾に通い始め、とあるときに塾の先生から言われた言葉で私の考え方が変わりました。結果が出なかった自分は、その先生に自分はやればできると言っていました。そのときに先生から「やればできるじゃない。やらないからできないんだ。」と言われました。それまでは自分はどうせやってもできないならやらない、といった「やらない後悔」をしていたことが多くありました。そこでだめでもやってみよう、それでベストをつくして失敗してしまったならしょうがないと考えるようにしました。受験でも当初多摩大学は第一志望の大学ではありませんでした。しかし第一志望の大学には落ちてしまい、その中で薦められたのがこの多摩大でした。英語かと思って当初は乗り気ではありませんでした。ですが少人数で授業を行っている、多摩大の出願をしたときに先輩から学内のパーソナルツアーで説明があり、ここでなら自分は成長することができるのではないかと思います。

実際に入学後の基礎英語教育（通称 AEP）で最初に成長を感じました。AEP のライティングの授業で今の SGS の学部長安田震一先生の授業を受けることができました。その授業では英語はもちろんです。駆け引きの重要性を大変実感することができました。

私は SGS に通う中で授業に出席したのにもかかわらず唯一単位を落とした授業が（履修削除のし忘れ等でほかにも落としたことはありますが）この AEP でした。授業では普通に過ごしていました。ではなぜこの授業を落としてしまったのかというと、中間テスト



安田震一学部長

ではこの質問を出すよと安田学部長は教えてくださいました。しかし学部長は見た目がものすごくプロレスラーの武藤敬司にそっくりで、少しひねくれた質問を出すのではないかとという偏見と大学にもなってそんなに優しくないだろうと思いました。そのため私はそこ以外のところを勉強していました。テスト当日問題を見たら先生が言っていたとおりそのまま出されました。偏見を持っていた私の解答用紙はほとんど白紙でした。期末テスト時も同じように質問を伝えてもらいました。その時の私の脳裏に、前回はそのまま出してきたから今度こそそんな甘いことないだろうと勝手に裏を読んでいました。しかしまた同じくそのまま問題が出されてしまい再びほぼ白紙。その結果この AEP の評価は F（不合格）でした。ここでは英語でのエッセイの書き方を学んでいたのと社会に出てから使える駆け引きを学ぶことが出来ました。

AEP が F であった直後の夏休みにハワイに留学に行きました。英語が苦手だった自分の能力が約半年でどれくらいできるようになったか、どれくらいできないのかが知りたかったため留学に行こうと思いました。英語の能力を知るのになぜ留学先をハワイにしたかの理由としては、最初から英語しか通じない国に行ってしまうと通じなかったらどうしようといった恐怖心があり、当時一年だったのでもまだほかの国に留学するチャンスはあると思っていました。そこで力試しとして少し日本語が通じる国にしたかったのでハワイに行きました。ハワイで一番大変だったのは移動でした。理由としては日本のバスと比べて次の停留所の表記が違い、ストリートとストリートの交わるころの名前だったり、そのバス停をアナウンスして少ししたら表示も消えてしまったり、どこ行きも数字の表記だけで、それが上りなのか下りなのかはそこだけではわからないので常にバスの運転手の方とコミュニケーションが大事になっていました。そのため留学中に一番大事だ



留学中お世話になったホストファミリー

と思ったのはコミュニケーション能力だと感じました。

留学や AEP を通じて学んだコミュニケーション能力や社会人の駆け引きを生かし、就職活動をしていました。結果としては、6月7日に第一希望の企業から内定をいただきました。就職活動を通し大事にしていることは自分を作らない。それはどういうことかということ、普段の自分らしく働くことができる企業に就職したいと思っています。企業が喜ぶような嘘をついてまで入社しても長く働き続けることができるとは思いません。それなら自分らしく話しをして、それを通してくれる企業に自分が合うのではないかと思います。

私は SGS に入学できて本当によかったと思います。それも一年次からの留学や AEP での失敗した経験からきていると思っています。学生時代は失敗してもそれを糧にやり直せばいいし、なぜ失敗してしまったのかなどを考えるチャンスだと思います。今のうちから挑戦をやめてしまっただけはいけないと思います。後輩には、ぜひ残りの学生生活で様々な事に挑戦して欲しいです。



留学中の同じクラスになった人とハワイ大学の学生（中央後ろ）と一緒に記念撮影

学生会メンバー紹介

学生会会長	会計	広報
福田 雅之(3年)	下野 咲子(2年)	田倉 大雅(1年)
副会長	会計	TCU会長
鈴木 悠哉(1年)	伊藤 和也(1年)	二見麻由奈(3年)
副会長	企画	学祭委員長
上地 慧(1年)	高幡 萌々(1年)	宮崎 遥子(3年)
書記	企画	体育会会長
村山 竜晟(1年)	市川 侑弥(1年)	渡邊 十夢(3年)
会計	広報	
宮川 直也(3年)	河崎 光将(1年)	



学生会執行部 新入生歓迎会

経営情報学部学生会執行部 学生会会長 福田 雅之

今年度の学生会の最初のイベントとして4月6日、7日の2日間、学内の食堂にて新入生歓迎会を開催いたしました。昨年度より引き続き開催された新入生歓迎会は、たくさんの新入生に来ていただき、2日間合わせて約150名となりました。

上級生の方々が熱心にサークル勧誘活動を行い、充実した内容だったと思います。また6日、7日の歓迎会でサークルに入る新入生もおり、貴重なイベントを開催できたと思います。さらにサークル紹介という意味合い以上に、学内団体と新入生の交流だけではなく、同時に学内団体同士の顔合わせもできました。学年を超えた学生同士、また教職員と学生の交流を深められるようなイベントを、今後も学生会一同で開催していきたいと思っております。ぜひお越しください。



新入生歓迎会の様子

入った理由と目標

経営情報学部学生会執行部 副会長 上地 慧

こんにちは！今年度の多摩大学経営情報学部、学生会の副会長を務めさせていただきます！一年の上地 慧です。

私が学生会に入ろうと思った理由と目標が、二つずつあります。理由の一つは高校時代も生徒会に入っており、仲間と協力しながら一つの物事を進めていく、楽しさを知りました。大学でも引き続き、より深くいろいろな経験をしていき、自分の能力が向上するように努力しようと考えます。目標は、学生会が中心となって学生と教授陣の関わりを深めていき、より良い学校生活が出来れば良いなどと思い、それを実現するために日々頑張っていきたいです。二つ目に、先輩達の活動を見ていて、とても自分の為になるなと思った部分もあり、逆に自分だったらこんな事をするなと考え、この組織に入る事を決意しました。目標は、自分が中心となり話し合いや、活動がスムーズに行えていい感じに、まとまれば良いなと思います。その為、先輩達から教えてもらった事や、今まで得た経験をフルに活かして頑張りますのでよろしくお祈りします！

学生会から得たいこと

経営情報学部学生会執行部 企画 高幡 萌々

この度、多摩大学経営情報学部学生会執行部企画を担当することになりました。1年の高幡萌々です。私の将来の夢は旅行業界で働くことです。また、そこで企画力を強みに働きたいと考えているので大学では高度な企画力と率先力を身につけたく、学生会に入りました。私の学生会での目標は多摩大学をより活気のある大学にしていけることです。多摩大学の現状は、はっきり言って学生同士の交流が薄いと思います。留学生との交流は、ほぼないと言えるでしょう。そんな現状を、学生会が運営するイベントを通じて少しずつ良くしていきたいと考えています。私たち1年はまだ学生会に入っていないのですが6月下旬に行われる留学生歓迎会に向けて、今必死に準備を行っています。初めてのことがばかりで難しく、話し合いもなかなか進まないこともあります。私たちにとって最初のイベントになるので必ず成功させるようにしたいです。4年間頑張りたいと思っています。応援よろしくお祈りします。